

# 最後の本位銀貨 = トレード・ダラーに関する一考察

松岡 和人

地域社会システム講座

## An Essay on the Last Standard Silver Dollar=Trade Dollar

Kazuto Matsuoka

Department of Regional and Social Systems, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### はじめに

本稿は、1870年代にアメリカで鑄造されたトレード・ダラー (trade dollar) について考察しようとするものである。このトレード・ダラーは1873年に鑄造を始めた貿易用1ドル銀貨の通称で、拡大するアジア貿易に貢献することが期待された銀貨であった。結果的にこの銀貨は、アメリカで最後の本位銀貨 (standard silver dollar) となったのである。なお、後述することになるが、このトレード・ダラーに合わせて鑄造した1円銀貨のことを、日本では貿易銀という名でよんでいたことが知られている。

アメリカにおいてトレード・ダラーが鑄造された1870年代は、金銀複本位制か金本位制のどちらを選択すべきか、という本位制論争が活発に行なわれた時期であった。世界的には金本位制への移行という潮流ができてきたが、アメリカでは銀を本位からはずすことに抵抗する自由銀運動 (free-silver movement) が続いていたのである<sup>(1)</sup>。このトレード・ダラーはそれまでの本位銀貨にかわって誕生した。しかし、トレード・ダラーは1878年に早々と鑄造停止になり、その後金銀複本位制への復帰の努力はなされたが、それは叶わなかったのである。

具体的には本稿の構成は次のようになっている。まず第1節では、トレード・ダラーの誕生について概観しておきたい。次に第2節では、有名な「1873年の犯罪」 (the Crime of 1873) について考えておきたい。この出来事はアメリカでは民間伝承ともなっている。また、「1873年の犯罪」によりトレード・ダラーが誕生したこともとりあげたい。第3節では、トレード・ダラーの鑄造停止に至る経緯について考えてみたい。そこでは銀の金に対する価格下落が大きな役割を果たしていたことがわかる。そして第4節では、アメリカとフランス両国における銀貨鑄造停止などに関わる類似した対応について言及しておきたい。

なお、本稿では銀貨、金貨の流通に関連してグレシャムの法則 (Gresham's law) が成立しているケースが何度か出てくる。しかし、グレシャムの法則については第3節における説明だけにとどめ、それ以外のところではグレシャムの法則と明示していない。

### 1. トレード・ダラーの誕生

1870年代は、各国がばらばらの本位制度を採用していた時代であった。イギリスは1816年に金本位制へ移行していたが、フランス、イタリアなどはラテン通貨同盟 (Latin Monetary Union)<sup>(2)</sup> をむすんで金銀複本位制を維持していたし、ドイツ、オーストリアなどは銀本位制、北欧諸国では銅本位制が続いていた。しかし、どの国も金本位制への移行も取りざたされ、その準備をするという状態であった。

そのような状況はアメリカも例外ではなかった。さらに当時のアメリカにとって貿易は最大の関心事の一つであったといっても過言ではない。アメリカは貿易拡大のための多くの方策をとっていた。その結果、1850年代にはアメリカ・ドルはカナダ・ドルと1:1で結ばれ、カナダとの貿易はアメリカ・ドルが支配していたといえる。一方、カリブ諸国との貿易ではメキシコ・ドル (通称、洋銀) が支配的であった。このように北中米貿易においてアメリカ・ドルとメキシコ・ドルの支配力は拮抗していた。

しかし、アジア貿易においてアメリカ・ドルは劣勢に立たされていた。アジア貿易の仲介通貨はほとんどメキシコ・ドルであった<sup>(3)</sup>。このような状況を解消すべく鑄造されたのがトレード・ダラーであった。それまでのアメリカの1ドル銀貨は412 1/2グレインの銀含有量であったのに対して、メキシコ・ドルは416グレインの銀含有量であったため、アメリカ・ドルは競争力をもつことができなかった。そのため、1873年から鑄造された貿易のためのトレード・ダラーは420グレインの銀含有量をもって登場したのである<sup>(4)</sup>。しか

し、トレード・ダラーの登場は単なる銀貨の種類が増加したことと片づけられなかった。それまでの本位銀貨が補助貨幣になると交替するようにトレード・ダラーは本位銀貨の地位に就いたのである。

このようにトレード・ダラーは貿易専用の1ドル銀貨として誕生したが、その流通を助けるような動きも現われた。その一つが日本の貿易銀であった。

日本では1870年以降、金本位制を採用したため、銀は補助貨幣となった。しかし、当時の太平洋における国際通貨であるメキシコ・ドルに合わせるように鑄造していた1円銀貨、すなわち貿易銀は銀貨でありながら補助貨幣ではない特別な存在であった<sup>(5)</sup>。つまり、貿易銀は開港場の貿易にのみ使用される貨幣とされたのである<sup>(6)</sup>。

このように日本では、国内では金本位制を採用しつつ、国際的には金銀複本位制にも対応するように貿易銀を鑄造していたのである。したがって、貿易銀の量目をトレード・ダラーに合わせて420グレインにしたことも当然であったかもしれない。

## 2. 1873年の犯罪

1873年当時、アメリカの金銀法定比価は16:1であったが、これは金の過大評価であったため、銀貨は流通せず、金貨のみが流通するという事態に陥っていた<sup>(7)</sup>。このような現状を追認するかのように、新たに誕生させたトレード・ダラーだけを本位銀貨にするという鑄貨法が、なぜか1873年に成立してしまったのである。その後、この法律の重大性に気づいた人々は、この法律は不正によって成立したと批判し、この出来事を「1873年の犯罪」とよぶようになったのである。この結果、トレード・ダラーだけが本位銀貨として鑄造され、それ以外の銀貨は補助貨幣とされてしまったのである<sup>(8)</sup>。

そもそもトレード・ダラーの鑄造目的は、アメリカ西部で産出が増大した銀の需要を満たすこととされたとされる。それはカリフォルニアと中国の貿易関係者に利益をもたらすと考えられたのである。しかし、トレード・ダラーはアジアに広く流通することにはならず、1878年には鑄造停止に追い込まれることとなった<sup>(9)</sup>。

このように1873年鑄貨法は、本位銀貨としてはトレード・ダラーのみの鑄造を認めるという誰も予想していなかったことになったが、さらにそのトレード・ダラーがあまり流通しないということになると、金銀複本位制を擁護する産銀業者の批判が高まったことは想像に難くない。それは彼らの同意なしに金本位制を採用したことと同じであった。

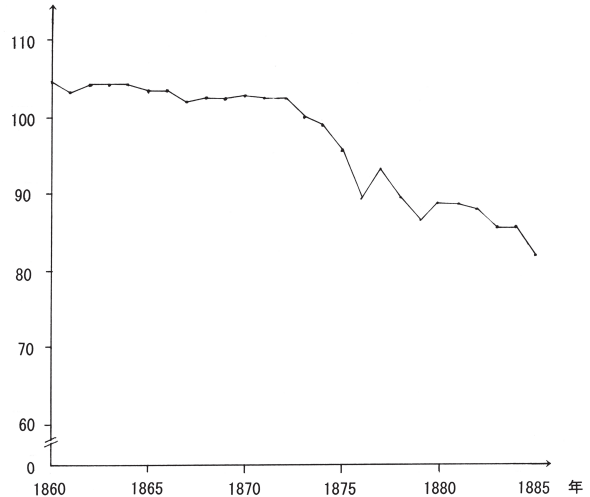
ここでもう一つとりあげておきたいことは、鑄貨法成立の際、ラテン通貨同盟の基準となっている5フラン銀貨に対して調整が試みられたということである

う。結局、これは実らなかったのであるが<sup>(10)</sup>。

## 3. トレード・ダラーの鑄造停止

いずれにしてもトレード・ダラーは、アメリカと中国、日本などのアジア諸国との貿易における国際通貨として機能する前に鑄造停止したのである。それは銀の金に対する価格下落から始まった<sup>(11)</sup>。

図1. 銀の対金価格の変動 (371 1/4グレインあたり) セント

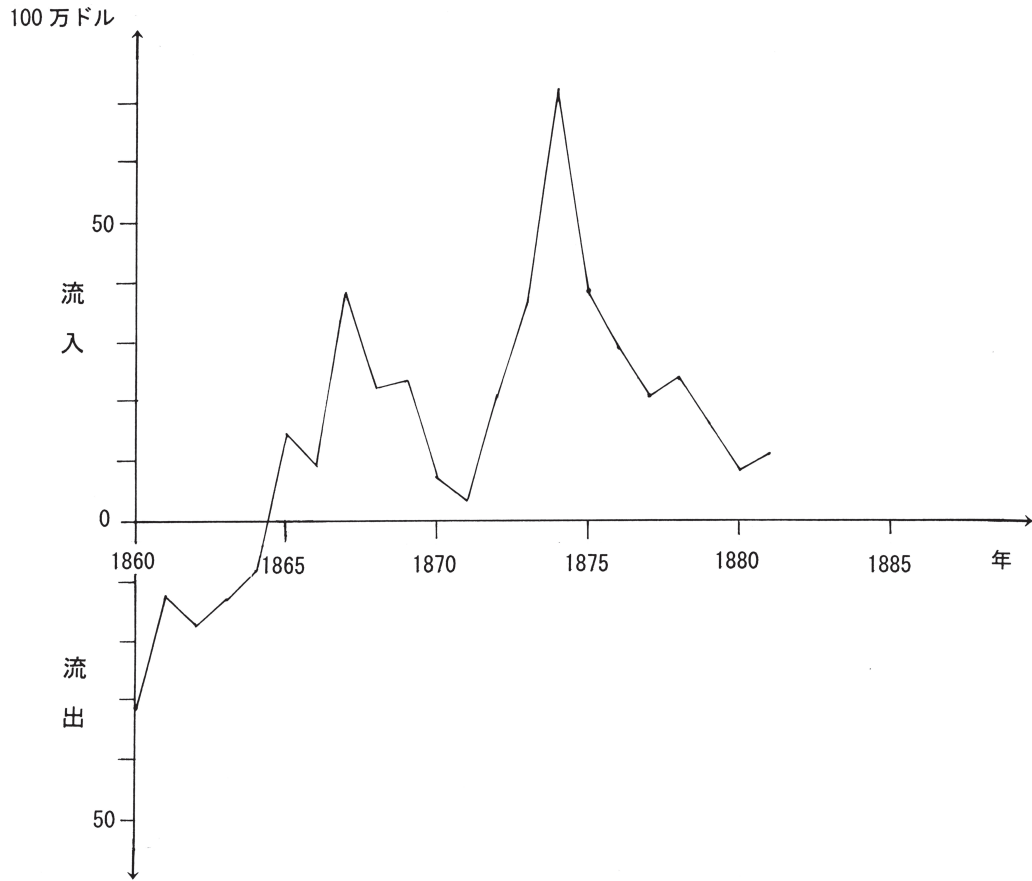


出所) Laughlin[1898]p.297のデータより作成。

図1は、当時の銀の対金価格の変動を表わしている。図1をみればわかるように、1870年までの銀の対金価格は安定的に推移していた。しかし、1870年代に入って銀の対金価格下落の兆候が現われ、1874年以降は急落が始まったのである。このような銀の対金価格の下落は、各国に影響を与え、特に金銀複本位制を維持している国にとっては無視できない事態となったのである。

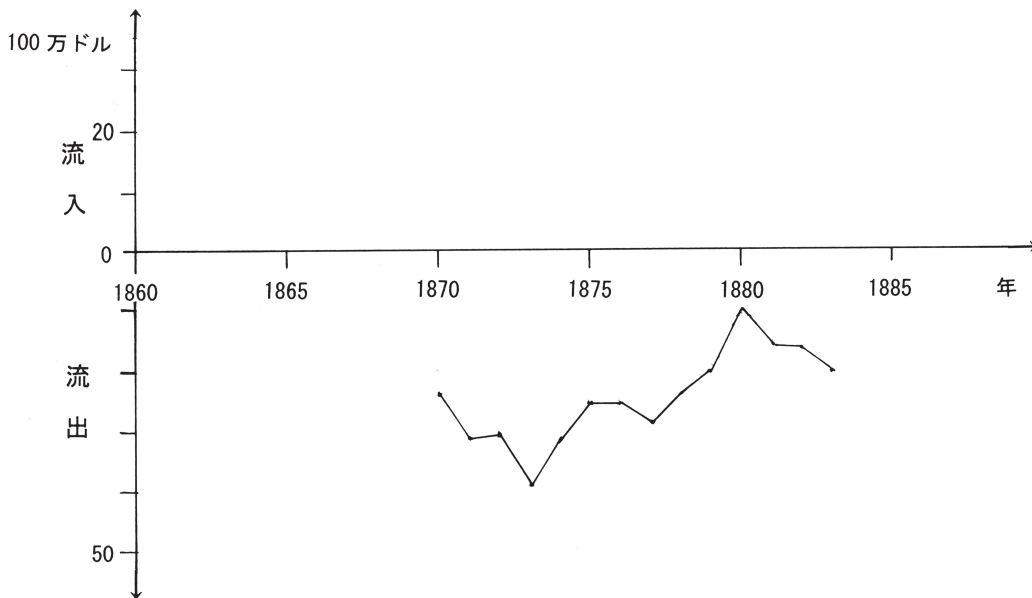
たとえば、金銀複本位制を採用しているラテン通貨同盟における主導的立場のフランスにとっては大問題になった。そこには有名なグレシャムの法則が働いていたと考えられている。「悪貨は良貨を駆逐する」ということばで要約されるグレシャムの法則であるが、それは悪貨と良貨がある場合、人々は良貨を退蔵して、支払いには悪貨を使用するということであった。1870年代後半のフランスでもこの法則が成立したと考えられるのである。つまり、フランスで金銀法定比価を変更しない限り、銀の対金価格の下落は他国と比べて銀が割高に評価されていることになってしまう。そのためフランスへ支払いをする場合、市場価格より割高に評価される銀、もしくは銀貨(悪貨)を支払いにあてて、金、もしくは金貨(良貨)を退蔵した方が得になるのである。

図2. フランスにおける銀の流出入



出所) Laughlin[1898]p.119のデータより作成.

図3. アメリカにおける銀の流出入



出所) Laughlin[1898]p.348のデータより作成.

図2をみてほしい。ここでは、フランスにおける銀の流出入を表わしている。1860年代前半までは銀の流出がみられたが、1870年代に入って大量の銀が流入したことがわかる。この中には貿易以外の投機的なものが含まれていたかもしれない。フランスでは、対金価格の下落した銀が国内に大量に流入したため、金銀複本位制の維持がむずかしくなったことは想像に難くない。結局、フランスは1876年に銀貨の鑄造を停止した。

一般的に金銀複本位制では金銀法定比価を設定するため、金銀市場比価が変動することによってグreshamの法則が働くことが多い。フランスの場合もこの例にもれずこの法則が働いたということになるだろう。

それではアメリカはどうかであったかということになる。図3はアメリカにおける銀の流出入を表わしている。この当時アメリカでは一貫して銀が流出している。しかし、1870年代の半ばから銀の流出が急減しており、この時点ではフランス同様、近い将来銀の流入が予想されたと考えられる。したがって対金価格が下落した銀が流入することを避けるため、1878年にトレード・ダラーを鑄造停止するに至ったと推測することもできよう。

以上のように、同じ金銀複本位制を採用していたフランス、そしてアメリカは、銀の対金価格下落の影響を受けて相次いで銀貨の鑄造を停止したのである。またベルギー、スペインなども銀貨の鑄造を停止した<sup>(12)</sup>。

#### 4. トレード・ダラーと5フラン銀貨

銀貨の鑄造を停止した諸国は、一国、また一国と金本位制を採用することになり、結局国際的金本位制が成立したということは周知のことである。しかし簡単に国際的金本位制が成立したわけではなかった。国際的金本位制が成立する裏ではアメリカとフランスによる金銀複本位制への模索が行なわれたのである<sup>(13)</sup>。

トレード・ダラーがアジアとの貿易のために鑄造されたことは既に述べたが、フランスの銀貨、特に5フラン銀貨もラテン通貨同盟諸国間の貿易にとって要になる通貨であった。したがって、トレード・ダラー、5フラン銀貨の鑄造停止は将来の国際通貨を失うという意味をもっていた。それは、アメリカ、フランス両国だけの問題には留まらず、金地金をもたない貿易相手国にとっても大問題になったことは疑いがない。

そもそもラテン通貨同盟は、1865年にフランスを中心に、イタリア、スイス、ベルギーの間で締結された。そこでは金銀比価を15.5:1と設定した金銀複本位制が採用され、1867年にはギリシャ、ブルガリアが加わるようになったのである。具体的には、フランスの5フラン銀貨に重量、純度を合わせる銀貨を加盟各国が鑄造するという形をとった。この5フラン銀貨を中心に、ラテン通貨同盟は加盟国間の貿易を拡大しようとしていたのである。

前述したように、ラテン通貨同盟が締結された1860年代時点でも、アメリカでは通貨同盟への意欲が高かったといわれている。当時、アメリカの5ドル金貨は25.85フランの価値をもっていたが、通貨同盟のためにドル価値を切下げようと考えていた<sup>(14)</sup>。しかし、加盟交渉に加わっていたイギリスの拒否によりそれ以上進展しなかったのである<sup>(15)</sup>。

このような経緯ののちに訪れたトレード・ダラー、5フラン銀貨の鑄造停止であったため、アメリカとフランスは金銀複本位制を再び採用することを計画し、新たな金銀比価を決定するための国際貨幣会議(International Monetary Conference)を1878年に開催したのである。しかし、決定するには至らず、その後も銀の使用を増加する方策が討議されたが、結論が出ぬまま会議は1892年を最後に開催されなかった<sup>(16)</sup>。

一般に、国際的金本位制は1880年代には成立していたと考えられているが、上でみたように、いくつかの国では金銀複本位制の復興を目指す動きがあったのである。結局、徒労に終わったとはいえ、銀を本位に戻すという動きには金地金をもたない諸国の後押しもあった。またその原動力には、アメリカ、フランスが1870年代に経験した銀本位の失敗が強く働いていたとも考えられるのである。

#### おわりに

以上の分析から次の二つのことがいえよう。

- 第一に、トレード・ダラーや5フラン銀貨はそれぞれ最後の本位銀貨となったが、どちらも可能性は低かったにしろ国際通貨を目指していたということである。それは偶然ではなく、19世紀後半、まさに通貨同盟を模索し、国際通貨を求める時代が始まっていた。
- 第二に、1870年代に始まった国際的な銀の対金価格の下落は、各国に少なからず影響を与えたということである。それは多くの国に金本位制採用を促す一方、アメリカ、フランスには金銀複本位制への復帰を目論ませることとなった。

#### 注

- (1) 19世紀から20世紀へかけての自由銀運動については、拙稿 [2009] でもとりあげている。
- (2) ラテン通貨同盟とアングロアメリカ通貨同盟案については、拙稿 [2002] でもとりあげている。
- (3) 当時、日本も円銀がアジアにおける国際通貨としてのメキシコ・ドルにとってかわることを目標にしていた。三上 [1975] pp.192-202.
- (4) Weatherford [1997]120-121.
- (5) 吉田 [1969] p.258.
- (6) 実際には国内取引にも使用されたとされる。
- (7) 拙稿 [2006] p.120.
- (8) 塩谷 [1978] p.78,79.
- (9) Myers [1970] pp.202-206.

- (10) Nussbaum [1957] p.150.
- (11) 銀の対金価格下落の原因としては、1871年にドイツが金本位制を採用するのに伴って、銀売り、金買いをしたこと、石見 [1995] p.26. アメリカのネバダ州で大銀鉱床が発見されたこと、塩谷 [1978] p.79. などが指摘されている。
- (12) 当時の日本について簡単に述べておこう。ここでは森 [1986] pp.4-9を参考にしてている。また、1880年代の松方デフレ政策などについては山口 [1957] pp.211-214. が参考になる。
- 前述のように日本では、原則的には金本位制、部分的には金銀複本位制というシステムを維持していた。そして日本でも、銀の対金価格の下落は影響したのである。銀地金価格の下落は、銀貨が割高で通用することになるため、金貨は流通から消えて、銀貨のみが流通することになったのである。
- そして1875年に、量目を420グレインに増やした貿易銀を鑄造したので問題は一層深刻になったと考えられる。新貿易銀は同じ1円であっても、メキシコ・ドルや旧貿易銀に比べて含有銀量が多いため、これも退蔵されてしまったのである。
- 結局、日本国内では貿易銀以外の銀貨のみが流通するという事態に陥ってしまった。このような状態に対して、政府は、1878年に貿易銀の量目を416グレインに戻し、実質的に銀本位制を採用することとしたのである。
- (13) アメリカが銀本位を主張した理由は、銀生産と債務者の政治的圧力であり、フランスが銀本位を主張した理由は、フランスとラテン通貨同盟国のもつ銀量にあるとされる。Nichols [1933] p.568.
- (14) 1868年にカナダは、アメリカが5ドル金貨をフランスの25フラン金貨と等価値に調整することを期待する法律を成立させているのである。Nussbaum [1957] pp.149-150.
- (15) Chown [1994] pp.86-88.
- (16) その後もアメリカでは万国複本位制度の成立を目指して外交努力をしたことが知られている。それらについては次の文献などが詳しい。Myers [1970] pp.206-208. 高垣 [1969] pp.121-124.
- 高垣寅次郎 [1969] 「欧米における銀通貨」、高垣寅次郎、吉田政治、岡田俊平『銀一本位通貨史における役割—』所収、清明会新書 2.
- 松岡 和人 [2002] 「ラテン通貨同盟の締結とアングロ-アメリカ通貨同盟案」、『愛知教育大学研究報告』第 51 輯（人文・社会科学編）。
- [2006] 「14 世紀における西欧の金銀複本位制と為替レート決定」、『愛知教育大学研究報告』第 55 輯（人文・社会科学編）。
- [2009] 「自由銀運動の比喩としての「オズの魔法使い」」、『愛知教育大学研究報告』第 58 輯（人文・社会科学編）。
- 三上 隆三 [1975] 『円の誕生—近代貨幣制度の成立—』東洋経済新報社。
- 森 七郎 [1986] 『日本通貨制度論』文人書房。
- 山口 茂 [1957] 『国際金融』（現代商業全集 10）春秋社。

(2010年 9 月17日受理)

## 参考文献

- Chown, John F. [1994] *A History of Money : From AD 800*, Routledge.
- Laughlin, J. Laurence [1898] *The History of Bimetallism in the United States*, D. Appleton and Company.
- Myers, Margaret G. [1970] *A Financial History of the United States*, Columbia University Press.
- Nichols, Jeanette P. [1933] "Silver Diplomacy", *Political Science Quarterly*, Vol. 48.
- Nussbaum, Arthur [1957] *A History of the Dollar*, Columbia University Press.
- Weatherford, Jack [1997] *The History of Money*, Three Rivers Press.
- 石見 徹 [1995] 『国際通貨・金融システムの歴史 :1870-1990』有斐閣。
- 岡田 俊平 [1969] 「日本における銀通貨」、高垣寅次郎、吉田政治、岡田俊平『銀一本位通貨史における役割—』所収、清明会新書 2.
- 塩谷 安夫 [1975] 『アメリカ・ドルの歴史』学文社。